

スカイスポーツによる まちづくり

～グライダーのメッカ・滝川市～



札幌から車で約1時間半。ジンギスカンのほか、近年では菜の花のまちとして知られる滝川市は、全国的にスカイスポーツ、グライダーのメッカとして知れ渡っています。スカイスポーツによるまちづくりを進めてきた滝川市の取り組みを取材しました。



たきかわスカイパーク

好条件を生かして、子どもたちに大空の夢を

滝川市におけるスカイスポーツへの取り組みは、今から25年前にさかのぼります。滝川市は、石狩川と空知川に挟まれたデルタ地帯に発展したまちで、しばしば水害に襲われていました。1981年の集中豪雨による水害発生時に、当時の吉岡清栄市長が空から市内の被害状況を視察したことが、スカイスポーツに着目するきっかけになります。

視察時の操縦を担当したのが、航空大学の教官でありながら、民間人のグライダー操縦指導も行っていた吉田勝三氏です。滝川市には、現在、北海道滑空協会長、(社)滝川スカイスポーツ振興協会長を務める近藤良四郎氏が在住していますが、近藤氏の後輩に当たるの

が吉田氏だったという縁から、空からの視察が実現したわけです。

そして、その視察中の対話から、大空への夢をまちづくりを生かしていこうという結論にたどり着いたのです。

当時の日本の世相は、暴走族がばっこしていました。若い世代のエネルギーを何かほかのことに向けさせることができないか。そこで思い立ったのが大空への夢でした。

上空から石狩川河川敷を見て、ここならグライダーの滑空場であれば可能だろうということから、「滝川に飛行場をつくろう、青少年に夢をふくらまそう、未来を拓こう」という考えに行き着いたのです。

その後、札幌航空協会に適地調査を依頼し、視察から約1カ月後にはテスト飛行を実施。その結果、総合的にみて滑空場としての立地条件に恵まれているとの評価が下されました。滝川の周辺は、航空交通管制区外であり、グライダー飛行に重要な上昇気流が発生しやすいという、好条件に恵まれていたのです。

スカイスportsとひと言にいても、熱気球やスカイダイビング、パラセーリングなど、さまざまな種類があります。その中でグライダーは、日本では滑空機と呼ばれており、エンジンではなく、上昇気流をつかまえて飛行するので、エンジンに起因したトラブルがありません。また、飛行は最初の練習から教官が同乗するため、安全管理がしっかりされ、飛行速度、特に着陸速度が遅いため、万が一の場合でも安全に着陸ができるなど、空を飛ぶものの中では最も安全性の高い部類に属するものです。

飛び立つ時は、ワイヤーロープをウィンチで巻き取り、たこを上げるようにグライダーを引っ張り上げるウィンチえい航、軽飛行機にナイロンロープをつけてグライダーを引く飛行機えい航があり、中には、離陸用のエンジンがついたモーターグライダーもあります。

吉田氏自身がグライダー愛好者であったこともあり、スカイスportsの中でもグライダーに着目し、子どもたちに大空の夢を与えていけるような事業を進めていこうということになったのです。

早速、翌'82年には事業を推進するための滝川航空協会を設立、会長には前述の近藤氏が就任します。その後、石狩川河川敷の占用許可を得て、滝川滑空場をオープン、北海道大学からグライダーを譲り受け、滝川航空協会として飛行を開始します。さらに、'83年には航空科学館と航空科学研修センターを建設。'84年には第1回滝川滑空選手権大会が開催され、'85年には市民体験搭乗会も開かれるようになりました。

北海道開発行政との連携

こうした滝川市の取り組みは、北海道開発行政の支援によって、より本格的な展開を遂げることになります。

'87年9月、道内で盛んになるスカイスports活動に着目し、北海道をスカイスportsのメッカにすべく、北海道開発局長の私的研究会としてスカイスportsネットワーク推進委員会が発足したのです。同委員会は'88年、スカイスportsネットワーク構想を取りまとめました。この構想は、航空公園を核に北海道の豊富な空域資源の活用を図り（拠点のネットワーク）、スカイスportsフェアを核に地域のスカイスports振興施策の連携を図り（施策のネットワーク）、スカイスports振興協会を核に関係者の連携を図る（担い手ネットワーク）という三つの推進プログラムからなっており、北海道の「空」を新たな余暇資源として活用することで、北海道の価値を高め、合わせて地域振興戦略の一つとして北海道開発の立場からスカイスportsを推進していくことが期待されるものでした。

さらに、こうした動きと合わせて、策定作業が進んでいた第5期北海道総合開発計画にも「スカイスports振興を中心に航空公園の整備、イベント開催による新

しいスポーツレクリエーションのメッカの形成を図る」ことが明記され、スカイスports振興の推進が図られることになったのです。

北海道では、'88年から北海道内のスカイスportsイベントをネットワークしたスカイスportsフェアが開催され、また、任意団体であったスカイスports推進連絡協議会とスカイスports振興協会を発展的に引き継ぐ形で、'90年に(社)北海道スカイスports協会が設立されます。

そして、航空公園の整備については、滝川市がそのモデル地域となり、石狩川高水敷において、スポーツ航空用の滑空場を中心とした滝川航空公園（以下「たきかわスカイパーク」）が整備されることになったのです。

一方、滝川市では昭和60年代に市役所内の横断的な組織として、スカイスports振興委員会を立ち上げ、まちにおけるスカイスports振興の検討を始めます。このころは、'87年にプレ日本滑空選手権大会、翌年に第6回全日本滑空選手権大会が開催され、滝川市がグライダーの全国的な拠点としてその重要性が認識され始めたころでもありました。

滝川市も、それ

までの単にグライダーを楽しむことから、スカイスportsの一つであるグライダーを中心とした地域開発プロジェクトと位置付け、北

現役のグライダーが収納されている航空動態博物館

海道における滝川市の果たすべき役割を担うという使命と滝川市民を結び、青少年の健全育成に寄与しようという大きな目標が見えてきたのです。

たきかわスカイパークは、'89年から北海道開発局の河川事業として高水敷整備、低水路護岸や階段護岸

整備などが進められます。その後、石狩川高水敷の滑空場を中心にして、滝川市が航空動態博物館を、協会が管理棟を建設し、'95年に整備が完了、今ではグライダーマニアに加え、年間3万人のギャラリーが訪れる観光名所になっています。

滝川スカイスports振興協会の設立

たきかわスカイパークの整備に伴い、これまで任意団体で活動してきた滝川航空協会は組織を強化し、同公園の運営主体となることが求められました。そこで、同協会を発展的に改組し、'90年に(社)滝川スカイスports振興協会が発足しました。

同協会の事務局長に就任したのが、池田亨さんです。池田さんは上ノ国町出身で、それまで陸上自衛隊北部方面航空隊第一対戦車ヘリコプター隊の飛行隊長を務めており、大学時代からグライダーをこよなく愛してきた人物です。滝川市の熱意あふれる誘いに転職を決意、'90年4月に滝川市教育委員会スカイスports振興課長に就任、同時に協会の事務局長に就任しました。

「私は防衛庁で育てられた人間ですから、その恩も返せずに職場を去ることについては非常に悩みました。でも、グライダーというものに行政が真正面から取り組むのは初めてのことでした。誰もやったことのないことだからこそ、自分がかかわって成功させたいと思ったのです。また、滝川市の皆さんの熱意にも打たれました。三顧の礼をもって迎えるという言葉がありますが、そんな印象を受けました。失敗はできないという思いもありましたが、成功すれば、グライダーマニアの私自身にとってもいい経験になるだろうし、何よりも行政が取り組むのだから、子どもたちにも夢を与えられると思いました。周囲はみんな転職を反対しましたが、いいことばかり思い描いて、滝川に来ることを決意しました」と池田さんは当時を振り返ります。

11歳の時、夕空に映えるジェット機にあこがれ、小学2年生からグライダーを始めたという池田さん。「私は、空とかかわることでここまで育てられてきた人間です。空を知ることによってしっかりした大人になれる。自分が空を目指した子どものころのことをしっかり子どもたちに伝えていきたい」という思いが、池田さんにはあったのです。

池田さんは、その後、滝川市スカイスports振興課長として、また協会事務局長として、スカイスportsを通じたまちづくりを実践してきました。中でも、協会を運営するに当たっては、商売として成り立つ収入を確保していくことが大きな命題でした。

このため、まずは、会員による会費収入のほか、グライダーの体験飛行やフライトトレーニングによって収入を得る。そして、滑空場があることを生かして、現役のグライダーや軽飛行機を展示する航空動態博物館を開設し、見学者から入館料を徴収。さらに、博物館内に展示されるグライダーや軽飛行機は、滝川市や協会所有のものだけでなく、個人や団体などが所有しているものを預かり、利用料の徴収と耐空検査の整備を請け負う。こうした収支全体の組み立てで、同協会では4月から11月までの正味7ヵ月間の飛行と各種の収入で、年間約6千万円の事業規模を確保、約1千万円の黒字をはじき出しています。

「われわれの商圏は日本全国。当初からターゲットは全国と考えていました。協会設立がちょうどバブル経済崩壊直後でしたから、どうなるものと心配しましたが、グライダーマニアは極端に増えもしなければ減りもしない。一定の規模が不変にあるのです。そこを対象にして魅力あるメニューを作れば、必ずお客さんはやってきます。特に、中高年は時間もお金も、そして思いもある。だから何度もやってくる人がいます」と池田さん。

年に8回開催されるサマートレーニングコースは、1週間のフライトトレーニングコースなので、宿泊、飲食、

買い物など、他産業への波及効果も期待できます。

また、協会ではこうした収入ベースの事業だけでなく、自主事業として、市内小中学校の体験授業の受け入れ、市外も含めた各学校の体験学習・見学の受け入れなど、子どもたちへのスカイスportsの啓蒙普及に関する活動も行っています。

その一方で、税金を使って一部の愛好者だけが恩恵を受けている、軽飛行機でえい航する際の騒音問題など、一部の市民からの手厳しい声があるのも事実。しかし、「ここに来てお金を落としてくれるのは、ほとんどが本州のお客さんです。そのお金がまちづくりに活用されているのですから、知名度を含めて、その波及効果を理解してほしい」と池田さんはいいます。

滝川市が試算したスカイスportsによる経済効果は、直接効果、マスコミによる宣伝効果を含めて、総生産額は約1億2千万円とされています。現在、協会には2名の市職員スタッフが常駐していますが、職員給与を差し引いても、経済効果はしっかりと現れているといえるでしょう。

今年7月30日にたきかわスカイパークで開催された「サマースカイフェスタ2006」は、毎年数千人が訪れる恒例のイベントとなっているほか、'03年には北海道文化放送(UHB)が制作し、全国ネットで放映されたテレビドラマ『^{*}ノースポイント・つばさ』の舞台となり、滝川市でロケが行われるなど、マスコミ効果はさまざまな形で見られ、特に知名度アップの点では大きな効果が見られているといえるでしょう。

思いをつなぐ人々

この25年間で滝川市長は、前述の吉岡市長、'91年から3期務めた林芳夫市長、そして'03年からは現在の



今年のサマートレーニングコースで全国からやってきた受講生に指導する池田さん

※ ノースポイント・つばさ

滝川を舞台に、母親に心を開けない札幌の女子高校生と母、滝川で一人暮らしをしながらグライダーの単独飛行を目指す祖母の親子3代が、それぞれの生き方を模索し、次第に互いを理解し合う姿を描いたドラマ。UHB開局30周年記念として、'03年1月に放送された。

田村弘市長と3代にわたっていますが、吉岡市長が描いた「子どもたちに大空への夢を」という思いは引き継がれ、スカイスports、グライダーは滝川市にとってランドマークのような存在になっています。

また、滝川市のスカイスports振興には、市長とともに、空の偉大さを知る職員たちの存在も忘れてはなりません。

市では'83年から有能なグライダー指導者を市職員として採用。その第一号が丸伊満さんでした。丸伊さんは、池田さんがグライダーを指導していた後輩に当たり、市職員になることについては、池田さんにも相談があったといいます。「自分の立場であれば、私なら行くと答えました」と池田さん。丸伊さんは'99年にオーストラリアで不慮の事故に遭い、この世を去ってしまいましたが、丸伊さんの指導を受けて、各種の資格取得者が続出、さまざまな競技会に参加、入賞を果たすなど、スカイスportsとしてのグライダーを市民に認識させた人物でもあります。また、市は'89年にスポーツ振興課内にスカイスports係を設置、初代係長が丸伊さんでした。

そして、'90年には池田さんが初代スカイスports振興課長に就任。その後、現在は協会事務局長である日口裕二さんが採用されています。日口さんは、将来滝川でスカイスportsにかかわる仕事をしたいという思いがあり、滝川西高等学校で教員を務めながら滝川に居住し、その後、市職員として'93年に転籍しました。

スカイスportsという特殊な分野で専門的な技術を持つ市職員を採用したことで、滝川におけるスカイスports振興はその熱意とともに進められてきたといえるでしょう。



昨年のサマースカイフェスタの様子

教育から地域の個性あるまちづくりへ

滝川市では、'04年度からスカイスportsの所管を教育委員会から経済部に移行しています。「これまでのスカイスports振興は教育面が中心でしたが、これから個性あるまちづくり、外客誘致、地域の特徴ある教育という3本柱で進めていくためです」と中嶋康雄経済部長。「経済部が所管することによって、発信ができます。移住や定住促進はもちろん、企業に対してもイメージが高まります。確かにまだ道外の認知の方が高いのですが、何よりも夏の暑さを避けて滝川でグライダーを楽しめることが魅力になっています。民間航空会社のパイロットがバカンスを楽しむために滝川を訪問したり、オーストラリアからの長期滞在者もいます。当初は教育の視点でしたが、今ではスカイスportsを地域が自慢できます。ですから、スカイスportsのまち・滝川を売り出していきたいと思っています」。

池田さんも「まずは頻繁にトレーニングコースに通ってもらう。そうすると、この土地にほれた、かかわっている人たちにほれたという人が出てくるかもしれない。そうすれば、移住というステップが考えられます。実際に、夏の間だけ滝川にアパートを借りている人もいます」と、移住の掘り起しにつながると考えています。

また、現在滝川では、小児ガンなどの難病とたたかっている子どもたちのために特別に配慮されたキャンプ場「そらぷちキッズキャンプ」を建設しようという計画が進んでいます。滝川市出身の元国土交通省官房審議官の松本守氏が事務局長を務める「病氣とたたかう子どもたちに夢のキャンプ（そらぷちキッズキャンプ）を創る会」が進めているもので、原則寄付金で建設・運営資金を賄い、全国に20万人いる難病とたたかう子どもたちのために、宿泊施設や食堂、体育館などを建設し、主催プログラム以外の期間は一般に開放するというもので、滝川市は市内にある丸加高原の土地の一

部を無償提供することを決定しています。'04年と'05年には滝川市内で夏と冬にプレキャンプが行われ、全国から集まった難病をかかえる子どもたちがグライダーを楽しんだといいます。

「グライダーは夏場のみのメニューでしたが、子どもたちは大変喜んでいました。滝川では難病の子どもたちにも夢を与えることができる」と中嶋部長。こうした取り組みにも滝川市のグライダーが活かされているのです。

スカイスポーツとまちづくり

池田さんは、'05年に滝川市を退職、それまでたしかわスカイパークを年間3万人が訪れる名所に育て上げ、全国にスカイスポーツのまち・滝川を発信してきました。また、現在は、協会の常務理事、チーフフライトインストラクターとして、今もスカイスポーツのまちづくりに関わっています。

「まちづくりはオンリーワンでなければいけません。そして、ストーリーがなければ駄目です。では、ストーリーとは何でしょう。それは必然性です。地域的な特性や印象、その要因も含めて、もともとそこにポテンシャルがあるものに手を加えることによって、まちづくりが進んでいく。ほかと比べて秀でているものがあれば、それに磨きをかける。そこが一番大切なことだと思っています。昔のような企業誘致型ではなく、自分たちの持っている潜在能力を自分たちの手で磨きをかけることで売り出していく。キラリと光るものがあれば、きっとまちづくりは進んでいきます」。

池田さんは、今年4月、日本初のグライダーによる日本列島縦断を敢行。鹿児島県枕崎市を飛び立ち、総飛行距離約2,100km、正味7日間かけて、たしかわスカイパークに帰還しました。「団塊世代の人たちに、まだまだ頑張れることを伝えたかった」と挑戦した思いを語ります。この様子は新聞やテレビで数多く報道され、スカ

イスポーツのまち・滝川の名が飛び交いました。

今後、協会運営は固定費の増加が見込まれることから、職員については成果給を導入。次年度からは市職員も2名から1名体制となります。今後は、後継者の育成問題など、次代にどのようにつなげていくかが大きな課題となっています。

「百年の計で考えていかなければなりませんからね」と池田さん。そのためにも「これからはもっと本格的に子どもたちを空に誘いたい」と抱負を語ります。「野球なら朝野球など、ポピュラーなスポーツでは朝練習があります。だから、ここでも朝野球をやる感覚で子どもたちにグライダーを教えたい。体験飛行レベルから、よりマニアックな、パイロットを目指すような人を育てていきたいのです。私の夢は、例えば、日本にパイロットの会社があれば、そこにいる人間は滝川出身者が圧倒的に多い、そんな状況を作りたいのです」。

既に滝川出身のグライダー指導者などは見られていますが、今後はIターン、Uターンなども期待できるのではないのでしょうか。

滝川で着実に進められているスカイスポーツによるまちづくりは、子どもたちに夢を与え、かつ、地域経済にも寄与するものとして、北海道の貴重な財産になっていくでしょう。



「トランス JAPAN」プロジェクトで日本初の列島縦断を成功させた池田さん。滝川到着は田村市長のほか、大勢の人が駆けつけた



グライダー飛行は毎年4月から。今年の初飛行の様子から